

「転換期における日中両国経済の比較研究」

堀 潔

桜美林大学産業研究所は1999年度より北京師範大学経済学院と共同で「転換期における日中両国経済の比較研究」と題する学術交流プログラムを行ってきた。毎年両大学でカンファレンスを開催し、双方の研究者の研究発表および意見交換を行ってきているが、今年度も11月7日(水)北京師範大学経済学院から3人の研究者を招いて、桜美林大学栄光館4階大会議室において、カンファレンスが開催された。同日は、多数の本学教員および学生が聴衆として参加した。各報告の後には活発な質疑応答がなされ、限られた時間のなかではあったが有意義な学術交流が行われた。

各報告の概要はあらまし以下のとおりであった。

【第1報告】戴賢遠(北京師範大学経済学院教授)「中国における外資との合弁企業について」

90年代に入って増加してきた中国市場への外資進出形態について、中国企業と多国籍企業の戦略目的の違いを踏まえて、中国企業と外資系多国籍企業との合弁企業形成のメカニズムを明らかにした。

【第2報告】大庭篤夫(本学経営政策学部教授)「日本の経営システムの変容」

終身雇用・年功序列を中心とする「日本の経営」システムが高度成長期には効率的に機

能したが、低成長期になると効率性アップのマイナス要因となっている状況を指摘しながら、高付加価値化を実現するための新しい経営システムのあり方について検討した。

【第3報告】李 翀(北京師範大学経済学院教授)「中国国有銀行の不良債権の解決策」

中国国有銀行が抱える不良債権の解消策として不良債権の証券化および株式化をあげ、いくつかの視点からそれぞれのメリット・デメリットを明らかにした。また、中国において「所有権」の概念があいまいであり、その明確化も含めたコーポレート・ガバナンスに関する諸制度の整備が行われる必要性を指摘した。

【第4報告】何 璋(北京師範大学経済学院教授)「中国における中小銀行の発展の行方」

中国経済の市場経済化・グローバル化が進んでいくなかで、リスクを引き受けた新たなビジネスチャンスに挑戦する中小企業や起業家へ融資する中小銀行の役割が期待されている。しかし中小銀行の経営体力が弱く、また中国の金融制度が未整備であるために中小銀行の発展が阻害されている。従って、金融システムの整備によって中小銀行が発展する余地を広げることが中国経済の更なる発展に不可欠であることを述べた。

【第5報告】堀 潔（本学経済学部助教授）
『『産業組織のアジア化』と中小企業』

海外生産化の進展を「産業空洞化」の問題ととらえることは現実を一面的に認識し、他を捨象してしまうことになりかねない。東アジアをひとつの地理的範囲としてアジア諸企業が競争し協力する「産業組織のアジア化」が進行している状況、と把握すべきである。そのなかで我が国製造業、とりわけ中小企業の生き残り策は他に先駆けて新製品開発や新市場開拓を継続的に行っていくことであることを述べた。

全報告終了後、座間紘一本学経済学部教授による総括が行われた。座間教授は概ね以下の3点を指摘した。5つの報告がそれぞれ日中両国のさまざまな経済事情について報告し

ており、また各報告に対する質疑も活発に行われ、「情報交換」の意味ではたいへん興味深く、有意義なカンファレンスであった。しかしながら、本学術交流プログラムのタイトルにもある「転換期」の意味が両国において異なっている。それゆえに本カンファレンスにおける議論が一定以上に深まらなかった点が惜しまれる。

本プロジェクトは来年度北京師範大学創立100周年に合わせ、本プロジェクトの成果を日中両国での出版物の刊行という形にして、一応の完成をみることになる。日中双方合わせて20余名の研究者が関わる一大プロジェクトは、研究者自身が得る「知的刺激」の大きさもさることながら、本学の行う国際学術交流活動の重要なステップとして、大きな役割を果たすことが期待される。

（経済学部助教授）